

(11) 巡礼第6日 アルカから  モンテ・ド・ゴソまで 15.7キロ



10月26日(金) 巡礼第6日、久しぶりにオテルのまともな朝食。気分良く8:00 出発。

カメラの電池交換の小野に付き合っている間に二人は先行。後からきた老夫婦の鍛えた早足にあつという間に追い越され、自分たちの足が如何に鈍いかを思い知る。 上り坂になって石川にやっと追いついた。シャツも帽子も汗ぐっしょり。



サンティアゴ空港が近い、離着陸する機影も轟音も頭上に大きい。今日の行程のほぼ中間地点まで来たことになる。そろそろラバコージャのバルがある筈だ。

国道を横切って右の巡礼道に下ると川幅2-3メートル程の小川。ラバコージャ川まで来るとサンティアゴまではあと10キロ、その昔、巡礼者がサンティアゴを目前にして汗と埃にまみれた身体をこの川で清めたという。昔はどうだったかわからないけれど、そんなに美しいとは思えない流れの水で手だけ洗った。(写真右 ラバコージャ川で手だけ洗った)



ビジャマヨールの峠を越え、山間に立つガリシア放送局の通信塔の横を過ぎると、遠く左手の丘の上に教皇ヨハネ・パウロ II 世が 2003 年に当地を訪問された記念に建てられた大きなモニュメントが見えた。“ああ、とうとう来た！”。峠を下ってサン・マルコス村を通り、緩やかな長い坂を上り切ると、そこがモンテ・ド・ゴソ“歓喜の丘”。頂上の手前にある古い小聖堂で感謝の祈りもそこに重いモチーラを背中で揺らせながら丘に駆け上った。



とうとう来た！ ここが“歓喜の丘”モンテ・ド・ゴソ。

何百年もの昔から今日に至るまで、幾多の困難を乗り越えてやっとたどり着いた巡礼者たちが、サンティアゴの眠る大聖堂を目前にこの丘に駆け上がって歓喜の声を上げたという。その丘の上に今、我々も立った。4.4キロ先の霞んだ空にサンティアゴ大聖堂の高く細い塔が周囲の建物の間に尖がって見えた。四人並んで唯々黙って眺めていた。

“この景色を見ることはもう二度と無いだろうなあー”、しっかりと眼に焼き付けた。



14:00、丘の広い斜面に造られたアルベルゲの受付に行くと「ハボンからようこそ!」、一部屋に2段ベッドが4台置かれた8人部屋を与えてくれた。宿泊は無料だけど壁に掛けてある寄付金箱に四人分をまとめて投入。エジプトからたった一人、リヤカーを引いて8,000キロも歩いてきたという40代の男性を含め、今日の宿泊者は男女合わせておそらく30人程度か、予想以上に空いていた。カフェテリアで豊富なメニューの中から選んで8ユーロの昼定食を終えてから、広々とした共同シャワー室で超大型メタボ氏と隣合せでのんびりと熱いシャワーを浴びた。(続く)